

1周年を迎えた4室体制

教育開発センターは、教員研修としてのFD、学習支援、ICTを活用した教育の推進を目的として、平成20年6月に附置機関として開設されました。その後、日本語表現や日本語教育についての取組を組織的に始めました。平成26年度からは「地(知)の拠点整備事業」の実施機関としての性格も持ちました。平成30年度までの事業終了後も本学では継続して伊勢志摩定住自立圏共生学教育プログラムとして展開しています。当初の伊勢志摩定住自立圏3市5町にとどまらず、連携自治体も増えつつあります。

教育ツールとして導入したmanaba courseは今や、本学に必要な不可欠なLMSとして定着しています。とくに令和2年度以降の本学のオンライン授業への対応はmanaba courseの利用で比較的スムーズに進めることができました。令和3年度からは教務システムとの自動連携もスタートしました。

教育開発センターが担ってきた役割が多様になってきたため令和2年10月から改組し、教育企画室、学習支援室、地域課題学修支援室、FD・SD室の4室体制として業務を明確化しました。年度の途中での改組であったため、令和3年度が新体制で年度の開始から終了までの1年間を送った最初の年度となりました。うまく業務を回せていたのかどうかは今後の自己点検・評価作業で検証する必要がありますが、まずは、このニューズレター第2号でこの1年間の本センターの活動を報告します。今後も本センターの取組に御理解と御協力をお願い申し上げます。



筒井琢磨(教育開発センター長)

新任教員研修を開催

FD・SD室は、文学部神道学科主催の新任教員研修を共催しました。本学の初任者研修は、SDとして教職員対象に1日間実施しています。ところがシラバス作成や授業の組み立て、評価など教育に特化した具体的な研修は従来体系的に行われてきませんでした。そこで今年度、神道学科で新任教員研修を試みるにあたり、FD・SD室も共催し、全学的に実施しました。受講者5名での計4回にわたる研修概要は下記のとおりです。講師を務められた中山郁先生(FD・SD室員)と受講された高野先生の感想を紹介しします。なお、次年度より本研修は、FD・SD室主催で実施予定です。

「教育と研究のあいだで」

中山郁(神道学科 教授)

「教員研修」というと、「なんだまたFDか」と呆れられることも多いかと思えます。「研究ではなく教育力向上を」とは、ここ20年来使い古されたFDのスローガン。しかし、実のところ、教員の基礎的な教育力の向上は、単に目の前の授業に直結するのみならず、中長期的にみればその大学の研究能力にも直結してゆくものといえます。なんとすれば、研究者を育てるのもまた、授業の役割なのですから！そして、自身の大学らしい学問の継承と発展をもし願うのならば、その大学は、自らの力で後継者を育成してゆく必要があります。FDは狭義には教育力向上の営みといえますが、実は大学の研究力向上にこそ直結しています。今後、研修を通じて多くの先生方が実り多い授業を生み出してゆくお手伝いのできれば幸いです。

「感想」

高野裕基(神道学科 助教)

本研修では、現在の高等教育で推進されている教授方法を根幹から理解するため、シラバスやアクティブラーニングなどに関わる技術面だけでなく、それらの基盤となる教育思想を体系的に学びました。また、グループワークやディスカッションを通して各教員の経験などを共有することで、自身の課題を明確化し、かつ自覚する機会にもなりました。今後は、本研修で得た知見を応用しつつ、実践と再考を繰り返す中で、教育力向上に努めていきます。

	テーマ	開催日時・会場
1	授業設計の思想とシラバス(到達目標)の書き方	令和3年5月5日(水) 15:10~16:40 於: 神道学科研究室
2	アクティブラーニング授業の行い方	令和3年6月17日(木) 16:50~18:20 於: 512教室
3	話し手に求められる力(図形並べ)	令和3年7月29日(木) 16:50~18:20 於: 511教室
4	授業運営・成績	令和3年10月28日(木) 16:50~18:20 於: 512教室

神道学科

神道学科では、令和3年度よりセルフアセスメントシートを試行的に導入しました。具体的には板井の指導学生のうち、2年次～4年次の37名を対象として、3月27日の成績配布時に資料とともに説明の上、協力を依頼しました。manaba courseのアンケート機能を用いて、実施期間は4月14日までとしたところ、30名より提出がありました。内容はコミュニケーション学科を参考に「ポートフォリオ(学習・課外・キャリア)」「ディプロマルーブリック」「資格・免許」を神道学科に合わせて実施しました。今回の結果を3・4年次生ではゼミ面談時の参考にもできた一方で、秋学期開始がオンライン授業となったことへ十分に対応できず、年度中1回だけの実施に留まりました。その中でも大学DPの達成度を5段階で自己評定した結果を見ると、学年があがるごとに達成度もあがる傾向をうかがえます。令和4年度以降は、学科全体でセメスターごとに実施し、結果の蓄積を目指します。

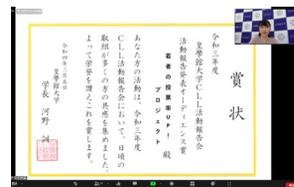
板井正斉(神道学科 教授)



CLL活動報告会を開催

去る3月5日(土)に令和3年度CLL活動報告会を開催しました。今回は、初の試みとして「地域志向卒業論文発表会(プレ開催)」を同時開催としました。ZOOMを利用したオンライン開催とし、報告会では口頭発表8団体、ポスター展示12団体が参加し、卒業論文では現代日本社会学科、国文学科より各1名が口頭発表を行いました。学外からも多くのご参加をいただきました。

CLLの口頭発表の部では「若者の投票率UP!プロジェクト」が会場投票の結果最も共感を得た団体として「活動報告発表オーディエンス賞」を河野学長より授与されました。また、表彰式では同時に令和3年度「伊勢志摩定住自立圏共生学Ⅰ・Ⅱ」のレポートのうちから市町担当の方の選による「市町賞」が合わせて12名に授与されました。



今年度は、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症拡大の中、難しい状況の中での活動を強いられましたが、各活動オンラインなどを駆使し、できることを着実に活動している様子が発表されました。中でも、オーディエンス賞に輝いた「若者の投票率UP!プロジェクト」は衆議院選挙や伊勢市議会議員選挙などにおける啓発活動が一定の成果を結んだことを数字を含めて発表することが評価の対象になったと思います。今後も感染症対策に十分配慮しつつ活動を継続して行ってほしいと考えています。

池山敦(地域課題学修支援室長)

数理・データサイエンス・AIに関する教育プログラム 「統計学基礎c」令和4年度開講予定

数理・データサイエンス・AI教育プログラムは政府の「AI戦略2019」(2019年6月策定)を受けて文部科学省が示した教育プログラムです。2025年の目標として、リテラシーレベル(全ての大学・高専生が正課で初級レベルの数理・データサイエンス・AIを習得)、応用基礎レベル(データサイエンス・AIを理解し、各専門分野で応用できる人材を年間約25万人育成)、エキスパートレベル(データサイエンス・AIを駆使してイノベーションを創出し、世界で活躍できる人材を年間約2,000人発掘・育成(約2,000人/年、そのうちトップクラス約100人/年)を置いています。本学では、リテラシーレベルと応用基礎レベルに該当するカリキュラムを令和5年度からスタートさせる予定です。

リテラシーレベルの文部科学省認定を受けるためには1年以上の実績が必要になるので、令和4年度に「統計学基礎」cクラスを開講し、リテラシーレベルのモデルカリキュラムに沿って授業を開始します。図の「導入(1.社会におけるデータ・AI利活用)」、「基礎(2.データリテラシー)」、「心得(3.データ・AI利活用における留意事項)」が教育内容になります。令和5年度からは「データサイエンス入門」1科目を置きます。

応用基礎レベルでもモデルカリキュラムが示されていて、令和6年度より順次4科目を置きます。応用基礎レベルでは各専門分野での応用が求められていますので、今後、各学科の専門科目との連携を図ります。

導入 基礎 心得 選択	1. 社会におけるデータ・AI利活用	1-1. 社会で活用されているデータ	1-2. 社会で活用されているデータ
	1-1. データ・AIの活用領域	1-3. データ・AIの活用領域	1-4. データ・AI利活用のための技術
	1-5. データ・AI利活用の現場	1-6. データ・AI利活用の課題と動向	
	2. データリテラシー	2-1. データを読む	2-2. データを説明する
	2-3. データを扱う		
3. データ・AI利活用における留意事項	3-1. データ・AIを扱う上での留意事項	3-2. データを守る上での留意事項	
4. オプション	4-1. 統計および物性基礎	4-2. アルゴリズム基礎	
4-3. データ構造とプログラミング基礎	4-4. 時系列データ解析		
4-5. ネットワーク	4-6. 画像解析		
4-7. データマイニング	4-8. データ活用実践(教養科目)		
4-9. データ活用実践(教養科目)			

数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)モデルカリキュラム
出典:「数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアム」



AI戦略2019 人材育成について
出典:「統合イノベーション戦略推進会議(第5回)資料」

筒井琢磨(教育開発センター長)

各室から(今年度活動報告/次年度計画)

教育企画室

令和2年10月1日にスタートした教育企画室は今年度、重点事業として①令和5年度カリキュラム改定と②学修成果の可視化を掲げて業務を進めてきました。前者に関してはとくに令和5年度から数理・データサイエンス・AI教育プログラムを全学で実施できるようにカリキュラムを整備しました。後者に関しては「使える」アセスメントポリシー整備に努め、並行してIR室との協働体制を強化してきました。また、セルフアセスメントによるディプロマポリシー達成度の可視化も試行を重ねてきました。

令和4年度も、令和3年度の路線を踏襲します。

数理・データサイエンス・AI教育プログラムは文部科学省リテラシーレベル認定にとどまらず、応用基礎レベル認定を目指します。そのためには本学の専門教育とのリンクが求められています。本学の培ってきた各学部・学科の専門性をいかに活かすかは全学的な取組として展開できるかにかかっています。政府の「AI戦略2019」に見合う人材の育成を本学ならではの教育内容・方法で果たせるよう、教育企画室として調整を図っていきます。具体的には、新たな副専攻を設置できるように進めていきます。

学修成果の可視化は学修者本位の教育を進めるうえでも、3つのポリシーを検証するうえでも重要な事項です。アセスメントポリシーで使用する指標を確定し、IR室で実施・分析した結果を踏まえ、教育企画室で指標の見直し等を行うという体制で進めていきます。

筒井琢磨(教育企画室長)

学習支援室

毎年、新年度の履修指導の中で実施していた日本語ブレースメントテスト・数学ブレースメントを、令和3年度はオンラインにて初めて実施しました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策になると同時に、学生の皆さんの都合に合わせて受験できるという利点もあり、受験しやすくなったのではないかと思います。令和4年度も引き続きオンラインにて実施することになっています。

秋学期においては学期終盤に全学オンライン授業となりました。在学生の皆さんはこれまでにオンライン授業を経験していたからか、大きな混乱はなかったようです。どのような授業形態であっても、学生の皆さんがより有意義な学びができるよう、学習支援を引き続き行ってまいります。

さて、学習支援室の業務の一つに「日本語教育」があります。本学における日本語教育といえば、留学生対象の「初年次ゼミ」と「日本語表現」の授業ですが、日本語教育を必要としているのは留学生だけではなく、平成27年に三重県、医療法人田中病院及び本学が、EPA(経済連携協定)に基づく外国人看護師候補者への支援に関する連携協定を締結し、本学では現在に至るまで日本語学習支援を行っています。令和3年には、同病院に新たな外国人看護師候補者が2名いらっしゃいました。国家試験合格という目標に向かって、日々努力されています。

濱畑静香(学習支援室長)

地域課題学修支援室

本年度もまもなく終わりとなります。本年度も昨年度と引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に翻

弄された一年間となりました。中でも「地域課題の解決を体験的に学修する」ことを標榜するCLL活動としては現地で活動が制限される中で年度となりました。

しかし、昨年度と異なり学生のオンラインスキルも向上し各プロジェクトにおいてはZOOMやLINEのビデオ通話などを活用した活動を盛んに行っていました。地域課題学修支援室としては、学生の学内外活動許可の手続きの支援、管理を始めとするコロナ禍における地域課題学修の支援のあり方を考える一年となりました。学生の中にもやはり感染症に対する恐れや戸惑いもあり、その思いをしっかりと受け止めながら支援を今後も続けていきたいと考えています。

部屋のしつらえとして、そら豆型の打ち合わせテーブルを配置したほか、オンラインでの議論をよりしやすくするために新たに32インチのモニターを備え、良好な打ち合わせ環境の整備を行いました。次年度以降も地域課題学修の歩みを止めぬよう、学生を支援していきたいと思えます。

池山敦(地域課題学修支援室長)

FD・SD室

本学では、「皇學館大学の求める教員像と各学部の教員組織の編成方針について」および、「皇學館大学内部質保証システム実施要綱」第9条(4)に基づき、組織的かつ体系的にFD活動を実施しています。実施に当たり教員各位のご理解と積極的なご参加に心より感謝を申し上げます。

さて、「皇學館大学の求める教員像」には、「1、本学建学の精神を理解し、実践しようとする意欲を有する人」「2、それぞれの専門分野に関して、十分な研究能力、もしくは豊かな実務経験を有している人」「3、学生教育に強い意欲を有し、常に授業方法・教材の開発を行い、学生に提示できる人」「4、学生指導に熱心にかかわることのできる人」と示されています。

あらためて読み返すとき、一教員として、4つの「人」に果たしてなれているだろうかと反省ばかりです。それでも、室町時代の内宮神職であり、俳諧の祖とされる荒木田守武は、「世の中に人をそだつる心こそ我を育てる心なりけれ(人を育てようとする心こそが、自分を育てる心となる)」と詠んでいます(伊勢論語に称えられた『世中百首』所収)。守武さんには遠く及びませんが、日々、迷いつつも学生と向き合おうとする気持ちを大切にしたいと思えます。

ひきつづきFD・SD室は、求められる教員像を目指しながら、一人ひとりがより良く向上できる機会を支援してまいります。

板井正斉(FD・SD室長)

皇學館大学 教育開発センター
News Letter vol.02

発行日:令和4(2022)年3月30日

発行:皇學館大学 教育開発センター

〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704

TEL:0596-22-6331

E-Mail:kaihatsu@kogakkan-u.ac.jp

http://www.kogakkan-u.ac.jp